

### Ⅲ 仙台市社会教育委員の会議セミナー

#### 私の行ってみたいくなる場所 ～学びの空間を考える～

##### ◎報告

報告者 星山幸男（仙台市社会教育委員の会議委員長・東北福祉大学教授）

##### ◎パネルディスカッション

コーディネーター 関本英太郎（仙台市社会教育委員の会議副委員長・東北大学大学院教授）

パネリスト 川邊和久氏（仙台囲碁同好会）

松尾福子氏（まつお文庫主宰）

佐々木隆二氏（写真家）

西川 正氏（特定非営利活動法人市民情報センター・ハンズオン埼玉常務理事）

日時：平成21年7月11日（土） 13時30分～15時50分

会場：せんだいメディアテーク 1階オープンスクエア

##### ◎報告

○星山 仙台市社会教育委員の会議は、社会教育に関して検討し、仙台市教育委員会への提言を行っております。今回は、「社会教育施設における学習支援のあり方～市民が使いやすい施設とは～」ということで、社会教育施設がよりよい施設になるような提言を行うことにしました。

私たちの会では、昨年、市内の施設調査で、市民センター3館、図書館3館、文学館と科学館を訪問し、職員から話を伺いました。しかし、大事なのは、一般の方たちの声を直接伺うこと、これを抜きにして市民の使いやすい施設というのを考えられないのではないかとということで、このセミナーを企画したというわけです。それで、一口に、簡単に市民が使いやすい施設といっても、これ大変難しいんですね。私たちの会議の中でも、このことが議論になりました。一体、市民に使いやすい施設とは何だろうかということ、これを改めて考えてみると、なかなか出てこないんですね。それで、私たちなりにちょっと抽象的にまとめたのが、市民が気軽にいつでも何度でも来館することができて、そして信頼できる職員から必要なアドバイスや情報を得ることが期待できる、そういう施設が使いやすい施設な

のではないかとというふうに考えて、その方向でいろいろ調査をしてまいりました。

それで、今の示し方は非常に抽象的で、もう少し具体的にということになるわけですが、その具体的にということになりますと、受付のところ、これ希望者だけにお渡ししておりますけれども、こういう私どもでまとめた調査の報告がございます。これをごらんいただくと、今どういう状況なのかということが少しずつ姿をあらわしてくるわけなんですけれども、その調査の結果をまずシンポジウムが始まる前に、簡単にかいつまんで紹介しておきたいと思います。

私どもが全部で8つの施設にお邪魔してお話を伺ってきた中で、まず最初に感じたことは、各施設の職員の皆さんが大変熱心に取り組んでおられるということです。この努力には、本当に頭が下がる思いがしました。また、それぞれの市民センターでの講座あるいは図書館や博物館でのさまざまな企画といった事業も大変工夫なさって、いろいろな形で毎年開催しているということも見えてきました。さらには、最近よく市民の参画という、計画段階から参加する参画ということが重要視されておりますけれども、その市民参画の取り組みについても大変前向きで、試

行錯誤しながら少しずつ進めているなということを実感いたしました。

しかしながら、そうはいつでも、やはり同時に課題も幾つか見えてまいりました。その課題の1つとして私たちが感じたのは、利用者の拡大をもっとしなければいけないのではないかとということが1つございます。これは、実は先ほどちょっと打ち合わせのときに話していた中でも出てきたんですが、例えばこのメディアテークですね、ほとんどの市民の方がここにメディアテークという施設があるというのはご存じなんですが、行ったことがありますかと言うと、まだ一度も入ったことないという方もいらっしゃるんですね。こんなすばらしい施設なのにと利用している方は思うんだろうと思うんですけども、しかし、初めて足を踏み入れるというのは、やはり何か機会がないと踏み入れられない。それは、市民センターであれ図書館であれ博物館であれ、やはり同様なんです。とてもすばらしい活動をしてはいるけれども、そのことがまだ十分に認知されていなかった、あるいは気づいていない市民の方たちがたくさんいらっしゃるって、行ったことないですよ、そうですね、行くのは選挙のときぐらいですかねというふうな方もいらっしゃるわけ。そういう方たちにも気軽に利用していただきたい。そうするためにはどうしたらいいかを考えていかなければいけないだろうということがございます。

それから、参画について非常に熱心に職員の方たちが取り組んでいるということを先ほど申しましたけれども、しかし、より一層その参画を進める必要があるのではないかと。この報告書の中でもちょっと触れておりますけれども、例えば今までの市民企画の講座というふうなものを各市民センターでやっておられますけれども、そのことだけにとどまらずに、もっと図書館や市民センターそれぞれの施設の運営とか、あるいはビジョンづくりなどにも市民がもっと積極的に参画してもいいのではないかとというふうなことも見えてきたわけです。

ただし、そうは申しまして、これ、言うは易しく行うは難しで、実際、じゃどういふふうに手をつけていったらいいのだろうかということがなかなか難しいというふうなこともございます。それから、やはりこういう使いやすい施設というふうなことを考えたときに、職員の対応ということが重要であるということも、各施設のお話の中から

見えてきましたけれども、職員の力量をもっと上げていくには、研修をどうしたらいいか、従来のような研修の方法でいいのだろうか、あるいはもっと市民の方たちと積極的に交流をし、その中から職員自身が市民とともに育ち、市民から学ぶという、そういうことの必要性、それをどうやったら実際にできていくのかというふうなことも課題として浮び上がってまいりました。

ただ、今申し上げたことは、実は私たちが施設や職員に対して行った調査から見えてきたことでありまして、先ほど申しましたように、利用者の皆さんの直接の声を伺ったというわけではないんです。ですから、きょうこれから市民の代表の方にもご登壇いただいてご意見を伺います。さらには、フロアからもご意見をいただく時間を設ける予定でおります。そのときに、どうか皆さんから忌憚のないご意見をお出しいただきたいと思います。私たちは、そういう市民の皆様の声をしっかりと受けとめて提言をまとめていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

簡単ではございますけれども、これで私たちのここまでの活動の報告といたしまして、あとはシンポジウムのほうに十分時間をとっていただきたいと思っておりますので、次にバトタッチをしたいと思っております。

きょうは、どうぞよろしくお願いたします。

## ◎パネルディスカッション

○関本 それでは、「私の行ってみたいくなる場所～学びの空間を考える～」というテーマのもとに、パネルディスカッションを開始させていただきます。

本日、このディスカッションの進行役、コーディネーターを務めます関本です。今、社会教育委員の会議の副委員長を務めております。約2時間近いですが、おつき合いのほどよろしくお願いたします。

○関本 繰り返しになりますけれども、先ほど委員長のあいさつにありましたように8つ（の施設を調査した）ということで、一部の施設にとどまりますけれども、社会教育委員の間で使いやすいということをテーマにいろいろ議論を重ねまして、中間報告的なところをまとめました。

きょう、とりわけ話題になる、また、話題にしたいとい

うところは、実際に利用されている人たちの意見というもの、考え方というものをどう酌み取っていくか、そのところに焦点が合わせられます。市民センター、図書館、博物館等、それぞれ大変な努力をされているということは十分承知しております。ですけれども、あくまでユーザーの側から、利用者の側から、こうすればもっとよくなるだろう、そういう意見というものに焦点を合わせてパネルディスカッションを展開したいと思います。あくまで、今以上に、現在のレベル以上によりよくするための批判的な意見というものを取りまとめていきたいというふうに思っております。

ここのメディアテークもそうなんですけれども、市民センター、図書館、それから博物館、今回調査したのは科学館と仙台文学館ですけれども、何よりも、それを使っている人たちの市民の気持ちというのが大切なんだろうというふうに思います。

先ほど言いました、少し触れましたけれども、批判的な意見というものも交えることにもなります。したがって、当事者にとってはちょっと耳に痛いところも出てくると思います。ある意味では、辛口的なところが出てくると思います。しかしながら、それを各施設が前向きにとらえていく、それを自分たちの施設をよくするために、どうやってそれをうまく生かしていくか、それがなければ、市民のための教育学習施設足り得ないんだろうというふうに思います。

これから、いろいろな意見が出てくるとは思いますけれども、ここで出された意見等、私たち、また委員会の中でそれを受けとめて、最終的な提言というところでつけ加えさせていただきたいと思います。

では、本日は使いやすいということが掲げられております。行ってみたくなる場所ですけれども、言葉を変えて言いますと使いやすいと。使いやすいというのは、それぞれ個人によって考え方が多分違うだろうと思うんです。それぞれ、また施設によっても違うだろうと思います。

本日、登壇者4名でございますけれども、そこでまず事前に、使いやすいとはどういうことかと、それぞれの利用者の立場から思いついたことを、簡単なスローガンのように手短かにまとめていただきました。それを紹介しつつ、なぜそう書いたのか、それをまず簡単に説明していただくというところから始めたいと思います。

まず、仙台囲碁同好会の川邊さんです。

○川邊 一般的なことだと思いますけれども、まず交通の便のいいことが1つですね。それから設備が充実していること、それから職員の接遇がよいこと、私はこの3つだろうと思います。

以上です。

○関本 詳しいことは、これからの報告で、多分こういうことがメインになって報告をしていただくということになります。交通の便がいい、設備が充実している、職員の接遇がよいですね。

それでは、お2人目ですけれども、松尾さんをお願いいたします。

○松尾 図書館というところは、まず恐らく私たちの生活の一番身近にあってほしい施設ということで、まず思いつくのが近いこと。歩いていける場所、近いところにあること。それからやっぱり読みたい本、見たい本、あるいは調べたい本、そういうものがすぐに見つかることということになるように思っています。

○関本 それでは、文学館からは佐々木さんです。お願いします。

○佐々木 橋渡しをしてくれることというのは、ちょっと抽象的ですけども、文学あるいは書物を読むというのは極めて個人的なことが多いのかなと思うんですが、その作品とか作家、自分でも探せますけれども、そういう橋渡しをしてくれるところ、あるいは接着剤の役割をするようなところが文学館だなというふうに感じております。

○関本 きょうは、先ほども紹介ありましたように、埼玉からNPO法人市民活動情報センターハンズオン埼玉代表理事の西川さんにいらしてもらいました。

それでは、西川さん、お願いします。

○西川 こんにちは。埼玉から来ました西川と申します。きょうはどうぞよろしく申し上げます。

これまでの3人は利用者の立場ということだったんで

すけれども、私は別にこちらの施設を利用しているわけではないので、もしこのテーマで聞かれたらということだと思います。きょうのさっきの質問で、自分にとっての使いやすさが話せる場所になっているかどうかです。先ほどの報告の中でもあったとおり、人によって使いやすさが違うというときに、一人一人の人が私にとってはこうですよということを話ができる場があるかどうか、あるいはそういうことを受けとめてもらっているというふうに感じられるところかどうかというのが、私にとってはすごく大事に感じています。なぜそう思ったかというのは、また後でゆっくりお話しさせていただけたらと思います。

どうぞよろしくをお願いします。

**○関本** まず、こういうふうになんとなく最初に思いついたイメージのようなものを出してもらったのは、皆さんに使いやすいという、そここのイメージを共有してもらうためです。皆さんそれぞれあると思いますけれども、今回はこういうような使いやすさということの観点において少し議論をしていくという、大体4人のお話の中でも、ああこんなようなことが多分一つの共通の要素としてとらえ出すことができるんだろうなとかと、そんなイメージをもう皆さん膨らませていらっしゃるだろうというふうに思います。それは、後ほど一人一人お話しさせていただきますので、その際に、今回はビジュアル的なものの資料というものも用意しつつ発表させていただくということになりますけれども、適宜このキーワードのようなものを思い出していただければと思います。

それでは、まず施設ごとにパネリストから報告していただきたいと思います。

本日のプログラムですけれども、それぞれまず3人の方に報告していただきます。大体10分ぐらいだというふうに思っていたきたいと思います。それぞれこの施設というのは、機能、役割が違いますので、後で全部共通という形で質問、意見交換を図るとするのはちょっと難しいかなと思います。それで、まず例えば川邊さんからお話がありましたら、そのときに何か意見がある人、それから何か質問がある人と、フロアの人も交えていろいろそれを出していただければというふうに思います。そういう形で3人の方にお話ししていただいて、大体30分から40分ぐらいになると思います。その後、西川さんにその総評等、そんなよう

なことを交えてお話をさせていただきます。そして、それから少し全体の中で改めて議論、それから意見交換、情報交換、そんな形でやりたいと思います。

それぞれのパネリストにはこんな形で報告していただきたいというふうをお願いしてあります。1つは、その施設と自分の活動のかかわり。それから、2つ目ですけれども、社会教育委員の会議として中間的なまとめを出しております。それを事前に読んでおいてもらっております。それで、それに関して少しコメントをいただこうということです。そして、3つ目は、自分の経験から踏まえて、この施設はこうすればもっとよくなるのになというふうな、そういう意見、提言というものををお願いするという、そういう3本柱で、10分という短い時間なんですけれども、皆さんそれなりにきちんと多分用意してくださっていると思いますので、その10分ぐらいでお話ししていただければと思います。

それではまず、本当はきちんと紹介しなければならないんですが、青葉区中央市民センターという、そこを代表するという形になりますが、仙台囲碁同好会の川邊さんから、まずお話をお願いいたします。

**○川邊** 今、ご紹介いただきました川邊ですが、私どもがどのように施設を使っているかということをもっとお話し申し上げますと、私どもは会員が100名おります。みんな、楽しみながら技量が向上するような企画を組み込んで、休館日を除く毎週木曜日、午前10時から午後3時まで、年間大体50回、会を開催しております。

それで、会員の90%ぐらいは青葉区中央市民センター以外の市民センターを本拠地としている碁の同好会の会員でございます。どうして遠くから集まってくるのかなということは、私もちょっとわからなかったんですけれども、よく考えてみますと、当会の運営が魅力的だと思われるからだと思います。これは、私どもの先輩が残してくれた、私どもにとりましては遺産でございます。年6回大会を開いて、半年ごとに昇段のシステムを取り入れまして、また技術レベルの高い会員も充実しております。こういうことがありまして、遠いにもかかわらず、仙台駅に近いという利点もございまして、青葉区に住んでいる会員は数えてみましたら39名、それ以外は他の区の住人なんです。その方が集まって、一生懸命技量の向上に努めていただい

ておるところでございます。

現在の利用状況はそれでございます、今、司会の方からお話ありましたように、社会教育委員の調査報告をお読みしまして感じたこと、難しいことがいっぱいございますのでわからないことがあるんですけども、利用しやすい市民センターにするのにどうすればいいかということですが、私の今青葉区中央市民センターを利用している立場としましては、申し分がないんじゃないかと。というのは、二、三年前、市民センターさんの資料で仙台市内の市民センターの利用率、これを見ますと、たしか青葉区中央市民センターが一番高く、部屋の会議室等の使用率が98%というふうに聞いておりました。次に、旭ヶ丘だったですかね。ですから、これ以上利用者をふやすというのは、そういう点からいってちょっと難しいのではないかと思います。スペースの点からいって限界じゃないかと思えます。

ただ、1つご提案ありましたことであるほどと思ったのは、休館日を何とか活用して、部外者に委託してでも運営できないかということがございましたので、その点についてはいろいろ問題があるかもしれませんが、いいアイデアじゃないかなと、検討する余地があることじゃないかと思った次第です。

それと、私ども毎週1回利用している者が見ますと、木曜日に利用しているんですが、ことしの木曜日はどういうわけか、祝日の翌日の休館日というのが5日あるんですね。年50回利用しているものの10%は休みになるんです。ですから、休館日を活用するということになれば、これを生かして私ども利用することができると、こういうふうに思いますので、この辺は検討していただければよろしいんじゃないかと思っております。

それから、職員の方の努力に対する評価の仕方が非常に難しいというようなことですが、これはごもつともなんですけれども、ただ市民センターの職員の方は一生懸命やっております。この接遇というのは、非常に難しいことだと思いますけれども、仙台市の職員の方の場合、所属する部局が多いため、経験を非常に積んで、接客の技術を学ぶ機会があるだろうと思っておりますので、この点は職員の方々、今までも努力しておりますけれども、これから新しく来る方等につきましても同じように努力をしていただければ、現在の非常に高い水準を維持できるんだ

ろうと思っております。お待ちしておりますところでございます。

それから、これはちょっと別だと思いますが、市民センターさんが市民センターを利用している人を10名ぐらい集めまして、年に4回、懇談会というのを開いてもらっています。そうしますと、全然違う世界の人たちの話を聞く機会がございますし、市民センターの役割というものごどのように発揮されているかというのを知る機会がございますので、私は大変これは結構なことだと思っております。よその市民センターもやっておりますけれども、広く利用者の声を聞いたりするよい機会だと思っております。

簡単でございますが、以上で終わらせていただきます。

○関本 ありがとうございます。

僕が聞き逃したのかな。会員の方で90%ぐらい以上が、青葉（区中央市民センター）以外の人ということですが、その理由というのは、例えば青葉の中央市民センターは、まず駐車場がないですよね。それでも、そんなにたくさん人がいらっしゃる理由というのは、何が魅力なんでしょうか。

○川邊 それは、さっきちょっと申し上げて、私も最初どうしてわざわざ遠いところから、と調べましたら、一番遠いところは仙山線の愛子中央駅、直線で大体20キロぐらいあるんですね、仙台駅まで。その人に聞いたら、歩くのも含めまして23キロだと。それから、名取市の境界あたりの人もおりますけれども、その人たちがみんな来ていますのは、近ければいいということなんですけれども、その人たちは、余り遠いと感じていないんですね。というのは、やっぱり碁を楽しむにはよその市民センターの会員、碁の会員は50人かそこら、多いところで60人ぐらいなんじゃないかね。だから、自分の住んでいるすぐそばに市民センターがあって、右に歩いて左に歩いて20分ぐらいで市民センターに碁をやりに行くことができるんです。それが、30分もかけてこの中央に集まってくるのはどうしてだろうと、私も最初思ったんです。

そうしたら、やっぱり先ほど申し上げましたように、強い人が割合そろっていると、段で言えば5段、6段という人がいて、胸を貸してくれると。そして、年に6回、2カ

月に一遍大会を開いて、賞品をもらってもらって、半年ごとに昇段審査をやって上がってもらおうと、そういったことが評価されて、今始まったんじゃないんですけれども、私どもの先輩がそういうことを気づいて、そこを魅力だと感じて集まってくださっているんだと思っております。

以上です。

**○関本** それでは、今、川邊さんから囲碁を利用するというを中心にして、その利用ということで青葉区中央市民センターの魅力等をお話ししていただきましたけれども、今の川邊さんのお話に関して何か質問とかご意見とか、何か補足ございますでしょうか。

だれかが1人手を挙げてくださいますと、大体次から次に続くのでありますけれども。

休館日に関してある提案がございましたけれども、これは多分、後で全施設にかかわることだと思いますので、これはちょっと置くとしまして、当事者の青葉区中央市民センターで働いているセンター職員の方がいらっしゃっているはずですが、川邊さんのお話を聞いて、何か感想等いただければと思うのですが。

**○フロア（青葉区中央市民センター）** 青葉区中央市民センターの樋口と申します。

先ほどから、川邊さんにいろいろと過大な評価をいただきまして、ありがとうございます。

それで、川邊さんのお話の中にありました職員の努力に対する評価ということで、接遇のことをいろいろとお話ししていただいたかと思うんですが、職員の接遇に関しましては、仙台ひと・まち交流財団というところが指定管理者として管理運営を請け負っているんですが、その財団としての研修、あるいは中央市民センターや生涯学習課で行っている研修等を通じて、接遇あるいは市民応対に対しても研さんを積んでいるところでございます。

それから、あともう一つお話のあった利用者懇談会、今年度も年3回予定しているところでございますが、こちらにつきましては周辺事業者の方、あるいは施設の利用者の方、周辺の小学校、幼稚園の方々等々と一緒になって、地域の課題あるいは施設をもっと利用しやすくするにはどうしたらいいのかというようなことについて、ご意見をちょうだいしているところでございます。

**○関本** 司会者は余りしゃしゃり出てはいけないんですが、そのご意見をいただいているところから、それからそれをどう反映させていくかということまで発言は必要じゃないかと思うんですが。

**○フロア（青葉区中央市民センター）** 失礼いたしました。

今年度あるいは昨年度いただいた利用者懇談会でのご意見、例えば出てきているところでは、私どものやっている講座の中で、昔遊びなどをご紹介するような講座をやっていたんですけれども、そういった講座に対して、子どもの居場所づくり等の観点からとてもいいことなので、また続けてやってほしいとか、そういった講座に対するご意見をいただきましたので、それにつきましては講座の中で反映しているというようなことをっております。

**○関本** ありがとうございます。

今、青葉区中央市民センターの樋口さんのほうから、少しそのセンターとしての考え方とかポリシーとか、そういうことをお話ししていただきましたけれども、それを受けて何かご意見等ございませんでしょうか。適切に時間配分を考えますので。

太白区の中央市民センターの方がいらっしゃるはずですが、今の青葉の話聞いて、何か感じたようなことがございますでしょうか。簡潔にお願いいたします。

**○フロア（太白区中央市民センター）** 太白区中央市民センターの高橋と申します。

太白区中央市民センターでも、青葉区中央市民センターと同じで、楽しく寄ってもらう、それで学んでもらう、育ってもらう。そのきっかけづくりをどうしていくかというところで、例えばお祭りを催したり、あとはサークルさんはサークルさんで自分たちで楽しくやっているんですけれども、その方たちにもお祭りに参加してもらおうとか。それで、職員自身も成長していかなくてはならないし、市民の方も成長していかなくてはならないということで、お互いに楽しく成長できる場をつくっていきたいというふうに思っております。

以上です。

○関本 ありがとうございます。

多分、いろいろまだ感じていらっしゃる方がいらっしゃると思いますけれども、後でまた全体の意見を受けたりする時間を設けますので、その際にご発言いただければというふうに思います。

それでは、2つ目、図書館というその施設で、まつお文庫主宰の松尾福子さんから、まずご報告いただきたいというふうに思います。

○松尾 自宅でまつお文庫という小さな子どもの図書館を開いています。1977年に始めましたので、ことしの秋でちょうど32年になるところです。

私にとって図書館は、文庫を始めたことで近くなったという、いきさつがあります。ただ、私が文庫を始めたころの仙台市の図書館の状況というのは、西公園に図書館が1館しかなかったというときですから、きょうは図書館に行くぞと思ったら、もう朝のうちから時間を決めて、2時間とか3時間、時間をとれるときでないと行けないというよな、そういう状況がありました。でも図書館というのは私たちが調べたい、読みたい、見たいと思っている本が本当にあるところだということをととても体験できたように思います。文庫をやって初めて図書館の良さを知ったという気がしています。

そして、2つ目の図書館が駅の東口にできますね。あれが、1983年です。私のかかっている手をつなぐ文庫の会で調べたことがあったのですが、2つ目の図書館ができたことで市民図書館の登録者が少し減りました。でもそれ以上に新しくできた図書館の登録者がぐんと増えました。ということは、図書館というのは大きな図書館が1つどこかにあれば、素晴らしい図書館があればそれで済むというものではなくて、小さくても、その大きい図書館としっかりネットワークができていけば、近くに図書館があったら、それまで図書館から足が遠のいていた人が行けるんですね。図書館というのは、そういう市民の本当に近くにしなければならぬところだなと思いました。

そして、文庫を始めたとき3歳と5歳だった子どもがいるのですけれども、宮城野通り図書館ができたころは、もう子どもたちも自転車に乗って一緒に本を借りに行くことができました。20分で行けたかなというところがあります。そして、その後、1990年に宮城野図書館がガス局のと

ころにできますね。あれでまた、私にとっては連坊の一高の坂を登らないで行けるところというところで、とても利用させていただきました。そして、若林区に若林図書館ができたのはそれから3年後、1993年だったのですけれども、そこはもう歩けば30分ですけれども、自転車で行くと10分ですね。これは本当にありがたいと思いました。何か調べ物をしたり、やっているときに、これわからない、あるいはこの本を見たいと思ったときに、その時間が4時でも5時でもぱっと出かけていける。図書館というのは本当にそういう意味ではまず近くにあってほしい、近くにあるということが本当に使いやすいということの条件だなと思っています。

そして、そこで探している本が見つかることが次の条件だと思うんですけれども、私は大人の本も借りていますけれども、子どもの本を借りることのほうが多いです。どういう意味で借りるかという、1つは文庫に何を入れたいか、どの本を置こうか、予算がない中で何を文庫に置こうかというときに、新刊本のチェックを雑誌とかいろいろなものでします。でも、雑誌だけではよくわからないので、やっぱり実物を手にとって確かめたいというところで、まずそういう本を見たいと思います。

それから、1人の作家についてとか、絵本作家について調べたいと思ったときに、その中に古い本も入っていたりすると、開架されていないことがあります。時として、見たい本のほとんどが書庫にしまっていて、持ってきてもらうという状況のときもあります。大人ならそうやって書庫から持ってきてもらうようお願いができますけれども、子どもたちというのは、開架されている本の中から選ぶのが原則だと思うんですね。ですから、これは職員の方の力量によるのだと思うんですけれども、新刊だけでなく古い本でも、子どもの本は大人の本と違って古くならない。いいものはピーターラビットのシリーズのように100年近く読み継がれている本もあるわけで、そういう古い本でも子どもたちに今手渡したいと思うものはしっかり開架してほしいと思います。

それから、図書館にはリクエストというサービスがありますよね。今、貸し出されていたり、なかったときに、ほかの図書館から借りてくださったり、そういうリクエストのサービスがあります。私は若林図書館をよく利用していますけれども、若林図書館はとていろいろな意味で職員

の人たちが本当に頑張っているし、利用者に対しても、とても対応がいいところです。ですけれども、たまたま4月と5月、2回ほど、リクエストをしたとき、2週間以上たっても予約の本が届かなかったことがありました。大人のベストセラーではなく、子どもの本だったのですが、いろいろ事情があったのかもしれませんが、間に合わなくてとうとう買ってしまったということがありました。リクエストサービスには迅速にこたえて欲しいと思っています。

それから、もう一つ、今この図書館にもパソコンが置いてあって、本があるかどうか、どこにあるかなどパソコンで調べることができるようになってきました。子どもたちもパソコンを使っている姿をよく見かけますが、できれば子ども専用のカウンターがあったらと思っています。仙台の図書館ではほとんど大人と子ども一緒のカウンターになっています。ただ、ここの図書館だけは建物的に2階が児童室で、3階が一般書を扱っていますので、子どもの本のカウンターと大人の本のカウンターが分かれているという利点があるのですけれども、私はほかの図書館も、できたら子ども用の小さなカウンターが子ども室のほうにあるといいのになと思っています。つまり、子どもがパソコンで自分の読みたい本を探すのではなくて、職員の人のところに行って、「こういう本ある?」「何かおもしろい本ない?」と言って、本のおしゃべりができるような空間があったら、子どもたちの利用は伸びていくんじゃないかというふうに思っています。

そういう意味で、市民図書館、ここのメディアテークを見ていると、児童室には子どもだけでなく大人もたくさん来ているのではないと思うのですけれども、子どもがカウンターの前でおしゃべりしている風景はあまり見たことがないように思います。その辺、子どもの利用を伸ばしていこうと思ったら、司書の人は大変かもしれないけれども、借りに来る子どもの顔と名前をしっかりと覚える、文庫のおばさんは利用者が少ないのでそれができるわけですけれども、そういうふうな個人的なつながりを持っていくような要素ができると、子どもにとってはあそこの図書館に行ったら名前を覚えてもらっている、知っているお姉さんがいる、おばさんがいるという形になると、全然利用は違ってくるんじゃないかなという気がしています。

それから、こうしたらもう少しよくなるというところでもう一つ思っていることは、仙台市内には文学館も美術館

もあって、文学館では、よく作家の方あるいは児童文学者の方をお呼びした講演会が年1回か2回はありますね。あるいは、美術館では絵本の原画展もあります。予算の少ない中で難しいかもしれませんが、図書館を利用する者にとっては、やっぱり図書館でも講演会や絵本の原画展をしてほしい、本と利用者を結びつけるためのさまざまな試みを、お金がかかることも含めてやっていただきたいなという思いでいます。とにかく、図書館の人と利用者が親しくなるような場面をいろいろなところでつくっていただけたらいいなと思っています。

以上です。

○関本 ありがとうございます。

ちょっと僕が聞き逃したのかもしれませんが、2つ目の提案で、リクエストサービスというところがありましたけれども、なかなか手に入らなかったというのは、それは新刊を頼んでいたのに入らなかったのか、それとも閉架場所に置かれていて、それがなかなか出てこなかったのか、どこかほかのところであって……。

○松尾 新刊ではないです。新刊でなくて、結構古い本で子どもの本です。だから、若林の図書館になくて、あるいは貸し出されていて、2週間たっても戻ってこなかったのだと思うのですけれども、いつ戻ってくるかというのはチェックできると思うので、2週間たたないと戻ってこないときには、ほかの館から借りてでもリクエストにこたえるということがあってもいいのかなと、ふとそのとき思いました。

○関本 わかりました。

今、幾つか利用者の立場から、特に子どもの利用、そういうところからの提案と希望等というのは出されたと思うのですけれども、今の松尾さんのご報告に関して、フロアか何かこういうようなことをつけ加えたいとか、こんな意見があるとかということ、何かございませんでしょうか。

今の松尾さんのお話、少し聞き逃したところがあるかもしれませんが、子どもにとって古い本でも常にいつも新鮮な輝きを持っている本だということ、そういう本に子どもにとって必要だと思われる本はできるだけ閉架してほしい。それから、リクエストということに対して、

迅速にかつそれなりの情報というものを提供してほしい。それから、特に司書等の人に対しては、子どものカウンターというようにところは設けてほしいんですけども、もっと子どもが本当に本を利用できるような、ある種サービスというものができるとか、資質とかそういうものをちゃんと磨いてほしいということが1つ。それから、最後に、やっぱり図書館は図書館として、読者と読者、図書館と読者というのを結びつけるようなイベントというものもやっぱり工夫してもいいのではないかと、いうふうにとまることができると思うんですけども、まずはそれでよろしいですかね。

それに対して、ちょっと皆様方からの意見を求めたりしたいんですけども、まず何かございますでしょうか。

それじゃ、それぞれちょっとやはり当事者の人に聞いてみるのが一番かなと思いますけれども、若林図書館の担当の職員の方がいらっしゃっているはずですけども、何かご意見等。

**○フロア（若林図書館）** 若林図書館の渡辺と申します。松尾さんにはいつも大変お世話になっております。ありがとうございます。

今、いろいろご意見をいただきました。それで、最初の図書館が近くにあれば、もっと利用されるというお話があったのですが、これはまさにそのとおりで、以前、若林に図書館がなかったときは近くの方は大変だったと思います。今、若林図書館には平日でも600人以上、土日の休日になると1,200人ぐらいの方々がお見えになって利用されております。

若林図書館、決して交通のアクセスはよくなくて、地下鉄の駅があるわけでもなく、バス停からも若干離れておりますし、駐車場も地下が有料になっているにもかかわらず、皆さんにおいでになっていただいております。

児童書がもっと開架になっていて、一般に広く見られるようになっていけばというお話がありました。それで、私どももいろいろ努力はしているんですけども、若林図書館のスペースが限られておりまして、できるだけ1階のフロアに出すようにはしているんですけども、書架にあまり詰め過ぎると、本がゆがんだり、出したり入れたりするのがきつくなって大変になるということもあって、どうしても入らない分については地下の開架書庫に入れざるを得ない

状況になっております。

それから、リクエストの本がなかなか届かなかったというのは、若林図書館でリクエストをなされたと思いますが、若林図書館にない本は、実は仙台市の図書館全体でバックアップする体制になっておりまして、若林図書館の本が貸し出し中であってもほかの図書館に在庫があれば、そこから送られてくるというシステムになっています。2週間たっても来なかったというのは、ほかの図書館にも在庫がなく、簡単に言えば、図書館で何冊か持っていたとしても、それが全部貸し出し中になってしまっていたのではないかと思います。どこかに在庫があれば若林図書館に回って来るというシステムになっております。

あとは、子ども用のカウンターが別に設けてあればということですが、これも、若林のようなところは、スペースと人員が限られているものですからなかなか難しいのですが、今回幸いにも泉図書館のほうに子供図書室ということで専用のコーナー、専用の図書室が設けられましたので、そこが有効に働いてくるだろうと期待しているところで

す。また、私どもの若林図書館では、毎週、お子様を対象にしたおはなし会をやったり、年4回の拡大おはなし会やほかのイベントなども行っております。夏のおはなし会を間もなくやりますし、子ども向けの映画会も企画して間もなく行います。赤ちゃん向けのおはなし会も行っております。ということで、子どもたちと本、あるいは図書館をつなぐイベントもできるだけ行うように努めております。何か足りない分がありましたら、またいろいろとおっしゃっていただければ助かります。

**○関本** 別に質疑応答という、国会答弁じゃないので、別に一つ一つ答えてもらわなくてもいいのかなと僕は思っていたんですが、懇切丁寧な対応、若林における丁寧な対応ということを理解できたというふうに思いますけれども、何かそれに関して、時間ないんですが、ちょっと簡単に何かあれば。松尾さん、何かありませんか。

**○松尾** ありがとうございます。館長さんには、本当にお世話になっております。

**○関本** 何か全体的な、別に若林でなくてもいいんですけど

れども、図書館の今出されたような問題に関して、何かご意見等ございませんでしょうか。

せっかくですから、一度ぐらい発言されてもいいのではないかと、僕などは思うんですけども、それはまた少しずつ場の雰囲気になれると手が挙がりやすくなるかもしれませんので。

じゃ、先にまず3つ目に進ませていただきます。

それで、博物館としてはいろいろあるんですけども、今回科学館と文学館の2つを調査させていただきました。そして、指定管理者制度ということで、仙台文学館を今回は取り上げさせてもらったんですが、そこをよく利用されていらっしゃるということで、佐々木さんからご報告いただきたいと思います。

**○佐々木** まず、私と文学館ということをお話して、次にどんな利用の仕方をしているかということと、あとはこんなふうにしたらもっといいのかなというお話をしたいと思います。今、仙台文学館は全国にも知名度が高いんです。その1つは、美人の館と言われているからなんです。これは、だれが命名したかということ、初代館長の井上ひさしさんなんです。なぜ美人の館になったかということ、井上ひさしさんが初代の館長を引き受けたときに、文学館で学芸員の方とか職員の方の裸の写真を送ったんですよ。裸といっても、どんと祭の裸参りの写真を送ったんですね。それを、井上ひさしさんは虫眼鏡をかけて穴があくほど見て、あっ、これはすごい美人がそろっているとって、美人の館というふうに命名したんですね。

それと、今年ちょうど文学館の開館10年になるんですけども、井上ひさしさんは9年間館長を務めました。そのおかげもあって、仙台文学館の知名度というのは、本当に全国的に知られております。美人の館でも知られておりますが、やはり学芸員の方も充実しているということが一つの評価になっているんじゃないかと思います。

文学館では、さまざまな催し物をしております。ざっと挙げましても、企画展、これは常設展のほかに企画展をやっていますし、講演会、それから講座、それからライブ文学館、これは出前なんです。文学館はご存じのとおり、少し交通の便が悪いというふうに言われているんですが、決してそんなことはないんです。市内からは二、三十分かかる場所にありますが、バスの便あるいは地下鉄の便が非

常にいいんです。ただ地下鉄の駅からも大分20分ぐらい歩かなければだめだという場所にはあります。ライブ文学館はそこからまちに出て、例えばメディアテークで朗読と音楽をやるとか、そういう催し物もしています。それから、ゼミナール、これは今やっているのは短歌の講座であるとか、あるいは宮澤賢治の銀河鉄道の夜であるとか、これからは森まゆみさんの講座が始まるとか、さまざまなそういうゼミナールをやっております。それから、夏になりますと、もう始まりますけれども、えほんのひろば、それから手作り創作絵本展、さまざまなこういった催し物を工夫してやっているというふうに思います。そのほかに、東北芸術工科大学の主催なんですけれども、東北ルネッサンスという（講座を）、これは去年から、ことしもやっていますけれども、夜7時までやっています。ですから、文学館の開館は特別にこういったものがあると、夜の7時ぐらまでやっているということですね。それから、ことしは10周年だったので吉里吉里国まつりというお祭りもやりました。屋台を出したりして、2日間やって約3,000人の方に集まいただきました。

こういった催し物を積極的にやっております。それから文学館の交流コーナーとか情報コーナーとか、建物の中にはレストランもありまして、杜の小径というレストランなんですけれども、ここは毎回の企画展に合わせてオリジナルのお料理をつくっています。最近、今までのお料理のリクエストをとって、一番人気のあったのをもう1回この秋に出しますよとかということまで含めて、常設展とか企画展には行かなくてもレストランだけには行くという人もいるようでして、全体的にさまざまな工夫をしているなというふうに思います。

余談ですけども、交流コーナーというところは窓際にあって、いすとテーブルがあるんですが、伊坂幸太郎さんがまだ今のように売れっ子じゃないときに、あのテーブルでワープロで原稿を書いていたとか、そういう場所的に非常にいいところなんです。台原森林公園の中にありまして、その不便だと言うことを逆に言いますと、逆にうんと静かなところですね。静かなところで物を考えたり、それから本を読むのには非常にいいところかなというふうに思っております。

私は、週に1回ぐらいは多分トータルすると行っているかなと思います。年に50回、あるいはもうちょっと行っ

ているかもしれませんが、こういうさまざまなイベントに顔を出しています。それで、これをごちそうに例えると、和食もあり洋食もあり中華料理もあり、あるいはデザートまでであるという、そういうたくさんのメニューがあって、しかもレシピもあって、栄養士もいて、それからシェフまでそろっていると。だから食べるだけじゃなくて自分でつくることもできる、どうもそういう役割をしているのかなというふうに思います。格好よく言うと心の栄養なんでしょうかね、そういったものが文学館の中で起こっているのかなと。ただ、食べて消化するのは一人一人なんですけれども。

聞いたんですけれども、利用者が年間で4万人ぐらいですね、現在。ですから、さまざまな工夫をして、お客さんというか利用者の方にたくさん来ていただきたいと頑張っているんですが、利用者の方が意外と少ないという。これは、多分、さまざまな工夫をして、数的に見ると少ないと思いますよね。ですから距離感があるのかなというふうに思いますね。これは、どうすればいいかというのは、具体的に答えはわかりませんが、別な見方をすると、特定の人たちは足しげく通っているわけですね。それから、企画展にはもちろん県外の人でも来ておりますし、東京からだって秋田からだって、多くの方が通いますけれども、いわば限られた人たちに利用されているという。ですから、余り文学になじみのない人とか、きっかけをつくるにはどうすればいいかということが、これからの課題なのかなと思います。

企画を見ますと、年齢層としますと、えほんのひろばというのは幼児から参加していますし、それから90代ぐらいの方もおりますので、かなり幅広い年齢層の方が利用されているというのがわかりますね。

それで、1つは、そのよさをどういうふうにしてアピールしていくかと。よさというか、この企画あるいは今やっていることが非常に本当にいいんですね。ですから、もったいないという気がします。せっかく工夫していろいろなことをやっているのに、利用する方が意外と少ないという、この辺がこれからの課題かなというふうに思っております。

それから、こうしたらという中で、1つは仙台にゆかりのある文学、作品とか作家であれば、とにかく文学館にちょっと聞いてみようということで、文学館に聞けば、文学

館にそろっていなくても、例えば夏目漱石の資料であれば東北大学にあって、東北大学のだれに問い合わせればいいですよと教えてくれる。これは図書館も同じですよ。そういうネットワークみたいなのがあって、とにかく文学館に聞いてみよう、こういう人がいるんだよということを見せてくれるような、何かそういうネットワークみたいなものがあればいいかなと思います。

それから、さっきちょっと話したんですけれども、文学館は森の中にありますので、森の中にあるということを生かすような工夫がないかなというふうに思うんですね。大衡村には、万葉の森とありますね。万葉集の歌と、それにまつわる植物を植えたり育てたりしておりますね。作家が亡くなると、何々忌という、花とか、例えば司馬遼太郎であれば菜の花忌とかとよく言いますよね。ですから、作家と花とか植物とは随分密接に関係のあるような気がするんですね。ですから、そういう植物をわざわざ植えるのか、あるいは今あるのを利用するのか、台原森林公園の植物を文学とつなげて生かすという方法もあるのではないかなというふうに思います。

それから、新聞とかテレビで批評が出ますよね、本の。NHKの週刊ブックレビューとか、あるいは各新聞には大体日曜日の朝刊に批評が出ますけれども、その中でも、仙台にゆかりのある、あるいは宮城県にゆかりのある作家、作品、舞台になったところ、こういったものを情報コーナーのあたりに、全然ないわけじゃなくて今でも少しはあるんですが、もう少し整理をして、タイミングよくあの辺に見せていただけたらば、もっといいのかなというふうに思っています。

それから、話があっちこっちになりますけれども、今仙台には作家がたくさん住んでいます。歌人の俵万智さん、佐伯一麦さん、伊集院静さん、三浦明博さん、伊坂幸太郎さん、熊谷達也さん、瀬名秀明さんという、そうそうたる人たちが仙台に住んでいるんですね。これは10年前にないことだったんですね。今なぜ仙台に作家がたくさん住んでいるかというのは、文学館という役割が直接的に間接的に何かかわりを持っているんじゃないかなと思っています。

伊坂さんと言えば、きのうエックス橋のところでぱったり伊坂さんと会いました。買い物袋を持ってヘッドホンをつけて歩いてきて、やあというようなもので、伊坂さんに

言わせると、ほどよい大きさだと言うんですね、仙台のまちは。歩いて行けるほどよい大きさが仙台であると、だから仙台が好きだと何かに書いていましたけれども、そういう偶然性も含めて作家がたくさん住んでいる。この作家の人たち、あるいは作品と文学館を通してつながりを持つ。一番先に話しましたが、本を読むというのは極めて孤独で個人的なものだと思うんですが、それを私はこう読んだけれども、ほかの人たちはどう思うんだろうと。いわゆる共有するということですね。これが1人じゃなくて、文学館を通してできたら、もっと読書とかあるいは文学にかかわってくれるのかなというふうに思います。

私は仕事柄、文学作品とか写真を撮ることが多いんですけども、結構読み下してやっているつもりでも、個人の限界というのはやっぱりあって、さまざま調べていくと違ったものもたくさんあるんですね。そういうときに、さっきのそのネットワークみたいなものがあって調べることができたり、あるいは人の話を聞いたりできるようなところがあれば、なおいいかなというふうに思っています。

多分、話したいことはもっとたくさんあったような気がしますが、とりあえず。

それから、バックに写っているのは今まで文学館での催し物のときの写真です。

○関本 ありがとうございます。

いろいろなよさがあり、それを踏まえてこんなふうな工夫というものがあれば、もっとすてきになるんじゃないかというお話だったと思いますけれども。

それじゃ、文学館、それから本来は科学館をご利用されている方の代表ということが本当は必要だったんですが、時間の関係上、今回文学館に限定させてもらいましたけれども、今の佐々木さんの発言に関して何かご意見とか、何かこんなものやっているととかといういろいろな情報があれば、どなたかございませんでしょうか。

壊れたスピーカーみたい、レコードみたいな感じがするんですけども、余りこんなに言いたくないんですが、公共施設というのは僕たちの税金で成り立っているんですから、僕たちが発言しないとよくなりません、僕は思っています。だから、皆さんの意見が本当は必要なんです。センターの人たちそれぞれ、それからそういうここに勤めている人たちの努力というのはすごく大切ですけども、市

民の声があって初めてもっとよくこういうのはよくなるので、皆さんからの声、形になった声というのは本当は一番必要なだろうというふうに僕は思うんですけども、できましたら、勇気を持って発言していただければと思います。

それじゃ、今の文学館に関して、ちょっともう少しこんなふうにしたらいんじゃないかという、本当にすてきなイベントをいろいろとやっているというのを僕もよく知っていますし、新聞なんかを読んでいても、この間仙台文学館に行って、こんなすてきなところを見てきたよという投書なんかも載っているのはよく知っているんですけども、それはそれとして、文学館としては、例えば今の佐々木さんの意見を踏まえて、今こんな工夫なんかもしようと考えていますよということがあれば、ちょっと簡潔にお話ししていただければと思います。

○フロア（仙台文学館） 本日はありがとうございます。仙台文学館の村上です。

今、佐々木さんからいろいろおっしゃっていただいて、こちらまさに10年目ということで、このような施設としてはまさに後発、もう先輩の博物館たちがいっぱいある中で、何ができると常にお客様の声を聞いたり、職員で相談しながら夢中で走ってきたというのが現状です。

今、佐々木さんからいただいたネットワークを広げることとか、いろいろな館の、組織としてとか制度としてとかいうよりは、館の学芸員同士が強い何かアンテナやネットワークを持つようなことから始まるのかなと思いつつ、いろいろな館の方とお話しする機会をなるべく持って、だれかを出していこうというふうなことは考えてきました。ただ、まだまだ経験がない部分、またそれほど器用で有能な文学館じゃないので、間に合わない、手が行き届かないところがいっぱいあるのかなというふうに（思います）。少しはやっているけれども、もっとこう幅広くやればいいのかということも改めて感じつつ、私もここで言われた先生のおっしゃるように、お客様の声、皆様の声を聞くことで何かヒントを得られればなということで、本日参りました。よろしく願いいたします。

○関本 よく仙台文学館、不便と言われますよね。

○フロア（仙台文学館） はい。

○関本 それに対して何かありますか。

○フロア（仙台文学館） そうですね、バスはそれほど不便ではないと思うのですが、10分待たずに大体駅前からバスが出ているという、意外な感じされますか、先生。意外な感じされますでしょうか。

○関本 いえ、そうではなくて、僕は文学館として逆にその不便さこそメリットに生かすべきだと……。

○フロア（仙台文学館） なるほどね。

○関本 台原の駅から文学館に続く道とか、そういうのをうまくつくったりしていくという、そういうことが必要なのではないかと。

○フロア（仙台文学館） なるほどね。はい、わかりました。

○関本 すみません、僕が勝手に言ってしまって……。

○フロア（仙台文学館） いいですよ、とても大事なことです。

例えば、台原に、ありきたりなんですけれども、今思っている中でやっていることは、矢印の標識を点在して立てていく。あと、分かれ道のところに今やっているイベントのポスターを掛けていく。そこに、案外、飲み食いするところというのが今出ましたけれども、ちょっと魅力的なので、杜の小径というレストランのかけ札を付けてみる。あるいは、ツツジが咲いたらツツジが咲きました、あるいはタケノコのとき、竹の季節は竹も大事にしたいので、ちょっとロープを張らしていただきますから、そこにタケノコ育成中という表示をするとか、そんなささやかなことはやっているんですけれども、なかなかまだまだ思いつかないこと、不十分なのかなと思いつつ、やっております。

あそこ、万葉の植物園にちなんで、例えば短歌に歌われた花が、カタクリがあったら、カタクリの花を目立たせていくとか、あるいは樹木に、例えば木や花というのは名前

がわかるだけで身近に感じて、そこに誘われて行きますので、名前を書いて文学館にいざなっていくようなこととか、いろいろなことを考えたり、話した入りはしているんですが、なかなか実現にまでは持っていく力量が伴っていないのが現状です。

○関本 いろいろな企画能力が、これからまた問われるのだろうと思います。

ちょっと発言しようかというお気持ちになられた方、いらっしゃいませんか。

○フロア 市内に住んでいる公務員なんですけれども、たくさん仙台市内に、本当にあれよあれよという間にいっぱい施設ができて、いろいろなところで楽しませていただいている中で、今お話の出た文学館、実は一番お気に入りの場所として、かなり利用させていただいております。なぜ私はそこに行くのだろうと、何か用事があったら行っているわけでもないときもありまして、さっき佐々木さんがおっしゃったレストランで、その展示に合わせたオリジナルランチを出している。それで、まさにそれだけを食べに行ったりしている私のことを実は指されたのではないかと、ちょっと心配になったんですけれども。

こういう社会教育施設、社会教育だけでなく文化施設一般全部だと思いますけれども、基本的に空間を提供するか、あるいはサービスを提供するか、その2つを引いてもなお余りある何ものかを提供するか、この3つだと私は思っております、そういう意味では、先ほど松尾さんがおっしゃった、5ポイント、6ポイントぐらいおっしゃいましたけれども、一番最後におっしゃった本と利用者を結びつけるプログラムをという話をされました。私は、基本的にこういう施設は当然最低限、まず図書館ならばちゃんと本を並べている、手早くサービスをする、できるだけ近い場所にそれをつくる、いろいろなことがありますけれども、一番大事な機能は、やっぱり人と人が出会う機能をちゃんとそこに持っているかどうかじゃないかというふうに思っています。

そういう意味で、何ていいますか、そういうことに対するホスピタリティをその施設が持っているかどうかということが、とてもこのメディアテークなんかを見ていると、なおさら強く感じます。文学館の私の一番の心地よさ

というのは、何でもあり、いろいろな魅力を振りまいてくれて、どこからでも入っておいでという、まさに五感のどこからでも入っておいでという姿勢をはっきり持っていると思いますね。何にもしたくないときでも、行く場所が文学館であったりする。私、本好きなんです、やっぱり本を読みたくないときも実はあるんですが、それでも文学館には行くとか、そういういろいろな動機性に優しく立ち向かってくれる、迎え入れてくれる施設というのは、私にとっては一番利用しやすい施設というふうに思っています。

以上です。

○関本 ありがとうございます。

何か今の意見を踏まえて。だんだん出てきますから、申しわけありません、簡潔にお願いいたします。

○フロア 今の方とは全く関係ないんですけども、私は一高齢者の市民としてきょう参加させていただいておるんです。また、そういうものの、何というか、的外れな話も聞かせてくれよというふうに司会者がおっしゃっていますので、若干的外れするかもしれません。それは、前もってご了解いただきたいと思います。

3つのグループからとりあえず中間的にご報告がありましたけれども、その1番目の市民センターに関連します。ご存じのように生涯学習がそれぞれの区域で実施されておりますけれども、その学習会場が非常に収容能力に差がございます、やりくりが非常に苦しいんです。ですから、質ではないんですけども、要するに量の世界で、多分余り話題にならないんだろうと思うんです、量の世界は、質のほうが多くて。その辺のところを相互利用ができるような、何か行政のほうからのアドバイスがいただければ非常にありがたいなと、これが市民センターの1つの実情、我々側の認識している実情とお願いごとです。

それから、もう一つは直接に市民センターにも図書館にも博物館系にも関係ないんですけども、市民活動の支援センターというのがございます。10周年迎えているはずで、要するに、間接の民営設備でございますので、若干市の行政とはかけ離れているかもしれませんが、そこで在仙の大学の先生方の講演を聞くチャンスが毎年あるんですけども、今お話し松尾先生の関連されている福

祉大学からも、実は我々のところにどんなことを講座持ったら、内容持ったら満足するのかなという質問が来ておるんですけども、要はこれは今度は量じゃなくて質の世界なんですけれども、要するに十分市民の希望するような講座内容というものをできるだけ把握すること、福祉大に限らず、関連する在仙の大学の先生方に、あるいは事務局の方に、これは質の問題ですけども、ご検討いただきたいということが2つ目です。それで、これは市民センターに関連する部分です。

それから、次に図書館に関連しまして、実は私、太白区におるんですけども、今の館長さんがお見えになりました、館長さんご自身の主張かどうかよくわからないんですけども、先ほど幾つかおっしゃられましたけれども、それぞれに個性を持たせようという考え方がおありのよう思うんですね。それで、たまたま市民の声、区民の声を代表しているかどうかわからないんですけども、太白区の図書館は医療情報というものを積極的に提供しようよという働きかけを、我々区民に対してなされたわけです。ですけども、私、図書館に1週間に1回ぐらい行くんですけども、余り人だかりがないんですよ。それで、何か館長さん1人が頑張っているような感じで。これも先ほど言った質と同じなんですけれども、区民の希望というものをとるような働きが、果たして図書館の中の機能としてあるのかなのかということが、これ私わからないんです。それが質の問題です。

私は、量のお願いが1つ、質のお願いが2つ、以上でございます。

○関本 ありがとうございます。

恐らく、これに対する回答というのが多分求められているんだろうと思いますけれども、ちょっと最後に全体の話し合いの場を持ちますので、そこで今関連するようなその施設の方が適切に答えることができれば、その旨をお願いいたします。それで、当然のことながら、今のこの場で回答できることはしていかなければならないんだろうと思います。

西川さん、お待たせしました。それじゃ、大所高所から、きょうのいろいろな話、それからフロアからも意見がありました。西川さんにとって、ここの仙台にとってのいろいろな施設の使いやすさということの発言を受けて、そして

西川さん自身が活動する過程の中で、使いやすさというのはなんだろうということで、10分ぐらいで、お願いいたします。

○西川 いろいろ聞かせていただいて、うなずくばかりの壇上という感じなんですけど、私の言おうとしたことは、実はさっきお2人、フロアから発言していた方とすごく重なっていて、やっぱりちゃんとみんなで話をしてみれば、だれかが何かを言うてくれるんだなというふうに改めて、こちらに座っている立場ですけれども、ちょっと感じています。

私が、埼玉からなぜわざわざきょうこの仙台に来ているかという、来させてもらったかという、私の仕事にしているNPOというのはハンズオン埼玉というNPOで、これは市民活動支援の分野のNPOでもあるし、それからいろいろな参加型のプログラムを提供することで、市民参加でまちをつくりましょうという、いろいろな事業をやっているNPOです。

印刷していただいて配っていただいた資料のうちのハンズオンタイムズという、こういう小さな機関紙に大体やっていることは載っています。みんなで焼き芋やろうと言ったり、作業所のクッキーを超リニューアルしてめちゃくちゃ売れるようにしたりとか、そういう作業をいろいろな人と一緒にやるのが私たちの仕事です。

きょう来させていただいているのは、ちょっとこのニュースにはほとんど載っていないんですが、もう1枚配っていただいた「私のだいいな場所」という、きょうのタイトル「私の行ってみたいくなる場所」ですけれども、「私のだいいな場所」という本を、もう今からこの秋で4年になるんですけれども、前に埼玉のいろいろなNPOをやっている人や、あるいは市民とか、あるいは自治体の職員の方と一緒に、公共施設のあり方について一度ちゃんと考えてみようという自主的な研究会をつくって、いろいろなおもしろい場所、あそこはすごくおもしろいらしいよと聞いたら行ってみたいという形でいろいろなところを訪ねて、何でそこがおもしろくなっているかということを生懸命、根掘り葉掘り聞いてきたという本なんです。

それが、自費出版で出したんですけれども、ロコミで3,000部ぐらい全国で買っていただいて、公共施設に市民がかかわること、あるいは市民自身が自分たちで組織をつ

くって運営することの意味というのは何なんだろうということ発信したんです。それで、その類書がほとんどそういう視点のものがなかったものですから、たくさんの方に受け入れていただいて、少し評判になりました。仙台のほうでもたくさん売っていただいていたりする方もいらっしゃいます。

そんなことで、ずっと公共施設のあり方はどうなんだろうというふうに問う、みんなで考えましょうということを生懸命してきたということがあって、きょう呼んでいただいています。本に関心のある方は、後で私に連絡いただくか、この組織まで、もしくは、仙台であればせんだい・みやぎNPOセンターさんに置いていただいてあるはずなので、問い合わせいただければというふうに思っています。

それで、きょうの今までのお話を聞いていて、そうですね、こうやりとりをするのを聞いていて、何ていうんですか、市民が要望して、施設を運営している行政の方が一生懸命こたえる凶だったと思うんですけれども、最後にお2人意見いただけたのでほっとしたという感じが僕にあって、私たち埼玉の地元でも、いつも市民は要望して、行政の方が、いや一生懸命やっているんですけれどもねという返事されるという、そういうコミュニケーションなんですね。いつでもそうです、これは。

例えば、私の娘が公立の保育所に通っていますけれども、保育所についてもっとこうしたほうがいいんじゃないんですか、先生、と言ったときに、先生たちは1言うとかくさん「言いわけ」（にきこえるようなこと）をいっぱい返してもらって、結局、結論としては、「できませんよ」ということをおっしゃっているんですけれども、そこに至るまでに長いお話があるんです。一生懸命やっていらっしゃることはわかるんですけれども、結果的には何もなっていないなという結論、経験をすごくたくさん私はしてきました。多分、先生・保育士さんたちは、本当は親に何も言われたいとは思っていないんじゃないかというふうに、私のほうから見えています。

さきほどお話が、まるで答弁のようだという話を関本先生がされていましたが、されていた方は、すごく考えていらっしゃるからわざわざここにいらしているというふうに思います。でも、一般的には、利用者の声をさほど聞きたくないんじゃないかな、というふうに思うことが、私の経験ではすごく多いです。

私の側からして言えば、どうせ私が何か言ったところで何も変わらないでしょうと思いながら先生に何か言っていたりすることが非常に多いです。運営する側は、保護者、例えばあるいは市民から何か言われてよかった、やりとりしてよかった、という経験を余りしていないんだろうなど、私は想像しています。

利用者がいろいろな要望を出したり、こうしたほうがいい、ああしたほうがいいと言ったりすることで、結果的にそれが実現しなかったり、あるいは自分の希望ではない別の市民の希望が通ってしまったときに、利用者は「どうせ私の言うことなんか聞いてくれないでしょう」という「恨み」を持つんですね。逆に、運営者の方は、西川さんはこう言っているけれども、あの人は違うこと言うのよねと、市民はつまり勝手なことを勝手に言う人たちのねという話になって、私たちこんなに頑張っているのに何もわかってくれないわという「恨み」を持っているんじゃないかというふうに、私は想像しています。

そういう両方が、どうせ言ってもな、聞いてもなというコミュニケーションをどうやって変えていけばいいかというところに、公共施設がよくなっていくポイントがあるんだろうというふうに思っています。コミュニケーションを変えろということですが、具体的にどう変えればいいかというのは、後でまた時間があつたら言いますけれども、その「どうせ」という言葉を変えていくにはどうしたらいいかということ、一緒に考えられたらいいなというふうに思っています。

1個だけつけ加えて言うと、さっき松尾さんがたしか「おしゃべりできる空間があるといいな」というふうに提案をされていたと思うんですが、私はこの間の、「どうせ」というあちらとこちらに分かれた議論が、「サービス」という言葉によってもっと強くなってしまったなという感じがしていて、施設側は市民に何かをサービスしてあげる側、それで市民の側はそのサービスを受け取る側、買う側ですね、消費者なんだというふうに立ててしまったがために、余計に、お互い閉じてきたのではないかと思っています。施設の側は、市民のためにこんなにやっているのにと言っているんですけども、市民の側はなかなかそのことが実感できずにいると。

私たち、この調査をやった後も続けているいろいろなところを見に行ったりしているんですが、キーワードとしては、

市民の「ために」何かをしているということではなくて、市民と「一緒に」何かをつくっている施設はすごく魅力的な感じの空気が流れているというのが結論なんです。「ために」ではなくて、何かを「ともに」つくるといって、そのことが上手になっていくと、多分市民の意見を聞きながら施設をつくっていくということが楽しいことになると思うんです。でも、例えば組織が大きくて自分たちの一存で何も決められないという施設だったりすると、意見は聞くんだけど何もできないから、結局、市民も職員も納得できないままになってしまいます。そうすると意見は聞かないほうがありました、というふうになってしまいましたね。これまでの公立の施設には、そういう構造的な問題が多分あるんだと思います。何ていうんですかね、こういう問題について、本当のところ聞きたいですか、皆さんは、どうですか。きょうは何か運営していられっしやる方が多いとちょっと聞いたものですから、ちょっと聞いてみたかったですけれども。

私たちのNPOは、会員さんに声を聞かないとNPO自体が成り立たなくなっていくんです。あるいは、商売やっている方は、消費者の意見を聞かないと成り立たない。例えば、パン屋さんにはまちに幾つもありますから、うちのパン屋さんに来てくれて苦情や意見を言ってくれる人は、とてもいい人だ、というふうにパン屋さんたちは言います。それは、改善していけるからです。でも、普通、お客さんはいやなら別のお店に行ってしまうだけです。声は聞こえてこないんですね。そうすると、改善できないことになっていきますよね。でも、公共施設あるいは行政がやっている施設は、ちがいますよね。そのまちにはその施設しかなかったりしますし、ほかを選択するということがまずなかったりするというのが1つと、もう一つは公共施設、行政の施設だから何を言ってもいいだろうと市民が思っている、何でも言ってくるということと、多分両方の要素があつて、施設側は言われっ放し、市民側は言いつ放しということが起こってしまうんだろうなというふうに思っています。そこを何か変えていける議論が、この後できたらいいなというふうに思っています。

○関本 それぞれちょっと一つ一つの利用者を代表して、それから全体を総括する形で今お話をいただきました。

今、西川さんお話しされましたけれども、それぞれまず

施設ごとにそれをもっとよく、よりよくするためのすべと  
いうか、そういうようなことを話題に、ここの登壇者とフ  
ロアの人たちとの意見交換という形で進めていったんで  
すけれども、今までのところでまだ何か、多分西川さんは  
また後で発言していただけたらと思いますけれども、またご  
意見等、個別的なところで、その施設ごとにというところ  
で何かございますでしょうか。

時間をちょっとオーバーしているという感じはしてい  
るんですけども、全体の共通の問題というのがどれだけ  
出るかちょっとまだ不明なので、もしかするとちゃんと時  
刻どおりに、予定したとおりのプログラムどおりにいて  
いるかもしれません。

先ほど、お話しませんでしたけれども、まず個別的に  
ということ。それから、それぞれセンターだろうが図書  
館だろうが、それから文学館だろうが、もしくは科学館だ  
ろうが、それぞれそういう個別的な公共施設というその枠  
を超えて、その差異を超えて共通する問題、公共施設で  
みんなが利用してもらうために、もっとよりよくするために  
共通の問題というのやっぱあるんじゃないかという  
ふうにも考えております。その点に関して、まずそれぞれ  
また簡潔にお話、まず登壇者、パネリストの方々に簡潔に  
お話ししてもらい、もし何か本当に、それこそ本当に共通  
の問題で、この場でまずは何らかの導きの糸といいますか、  
少しヒントみたいなのをやっぱちゃんとつくっておか  
なければならぬということがあれば、それを議論しながら、  
最後のまとめに入っていきたいというふうに思います。

それじゃ、佐々木さんからいきましようか、逆に、はい。

**○佐々木** 共通ということになりますと、1つは、やっぱ  
り気になる場所とか気軽に立ち寄れるという、もう一歩進  
めて、どうしても行ってみたいくなる場所、どうしても行っ  
てみたいというような場所づくりかなと思います。

その1つは、例えばなんですけれども、市民参加型の企  
画をする、あるいは企画だけでなく構成までして、ある  
いはPRまでも市民の方たちがやる。つまり、少なくとも  
文学館の場合ですと、企画というのは文学館側でやるもの  
が結構多いんですけども、その中の1年に1つでもそう  
いったものがあれば、そのPRという中でも何かこう突破  
口というか、あるような気がしているんですけども。

**○関本** ありがとうございます。

ちょっと頭にとめておいてくださいね、すごく大切な視  
点です。

それじゃ、松尾さん、お願いします。

**○松尾** 1つは、人の問題かなと思っています。その施設  
が、本当に市民にとっていいものになるかどうかって、市  
民がかかわることも大事なんですけれども、職員の方の資  
質をどう高めていくかということで、特に図書館について  
言えば、正規職員の司書の資格の方の割合が、仙台市はと  
ても低いですね、まだ。ですから、嘱託の人はみんな司書  
の資格を持っていたりするんですけども、正規の職員の方  
の中の司書の資格を持っている人が少ないという中で、  
どうやって研修の場を広げていくかということかなと思  
いますけれども、資質を高めるためということが1つ課題  
かなと思います。

それから、もう一つ、いろいろな施設の中でそういう指  
定管理者制度が導入されて、昨年初めて広瀬図書館に丸善  
が入りました。でも図書館はそういうものにはなじまない  
のではないかと考えています。指定管理者制度導入という  
のには慎重であっていただきたいと思っています。

**○関本** じゃ、川邊さん、お願いします。

**○川邊** 特に申し上げることがないんですが、市民センタ  
ーが50ぐらいあるというお話ですが、よそもちょっとのぞ  
いてみることもあるんですが、青葉区中央市民センターほど  
利用率が高くはなさそうなんです、駐車場が20台分ぐら  
いあるところもありますし、だから一律には行かないと思  
いますけれども。私ども2年ぐらい前からでしょうか、場  
所を予約するのに抽せん制度が取り入れられまして、当た  
り外れが出ました。これが、みんな平等ですから、その点  
ではよろしいんですけども、非常に頭の痛い問題でござ  
います。いい解決策はないと思いますけれども。それだけ  
です。

**○関本** それでは、西川さんからお願いしたいんですが、  
先ほどコミュニケーションを変えとか、言われてよかつ  
たというような、そういうような気持ちにさせるとか、い  
ずれにしろ聞かないと成り立たない。僕らは、この指定者

管理制度にすごいかかわることかなと思うんですけども、ちょっと全体的な問題で何かご意見等、ご発言お願いいたします。

○西川 先ほど、早口でしゃべり過ぎてしまってごめんなさい。ちょっと落ち着いてしゃべろうと思います。

パブリックというのは自分と違う意見の人がいるということ認めることなんですよ。例えば保育所だったら私は泥んこ遊びをいっぱいやってほしいという親なんですけれども、絶対やめてくれという親もいるわけです。そのときに、先生たちはものすごい困るんです。でも、そういう違う意見があるときこそ、勝手に決めないで、私も意見を言うし、泥んこ嫌だと言っている人も意見を言うということをしませうね、そういう利用者・市民同士が話せる場をつくりませうね、ということが言いたかったんです。

何で私がそうしてほしいと思っているか、なぜその人は嫌かと思っているかということ、本当は市民と市民が話をしていかななくてはいけないですよ、ということが言いたかったんです。

市民が要望して施設の側がこたえるという、さっき私、「言いわけに聞こえる」という言い方をしてしまいましたけれども、多分そうではなくて、市民同士がこの施設をどうしていこうかという話ができるようになる場を、そういう施設を運営者がどうやってつくればいいのかということだと思うんです。

それは、例えば公民館の時代でしたら今も残っていると思いますけれども、公民館運営審議会とか、そういう審議会という会議もあるかもしれないですし、逆にきょうは壇上にこっちが座って、皆さんが客席でという、こういう形をとっていますけれども、実はもっと平場でカフェみたいに御飯食べながら話をするとしたら、全然違う意見が出てきたりするかもしれないし、いろいろな行事の中でキーになる人といろいろな話をしていくということもあるかもしれないし、いろいろなコミュニケーションの工夫があっていいと思うんです。

さっき、途中になってしまったんですけども、おしゃべりできる空間がある、子どもたちと一緒におしゃべりしながらというのは、僕も実は保育所に、「先生、保育所にお茶を飲めるところをつくってくれないか」という話をよ

くしていたんです。そうすると、いろいろな雑談をしながら、先生たちが何を思いながら毎日運営しているかということを知ることになります。そうすると、私がほかの利用者、保護者さんに、先生たちこんなふうにいるらしいよと伝えることもできます。そういうコミュニケーションももっと必要ですよ。

それから、意見を聞いたら違う結論になっても全然いいと思うんです。でも、なぜその結論になったかをきちんと返すことができれば、私の思っていることは実現しなかったけれども、なぜその場でこういうプログラムになってしまったかはわかるという、ことにしていきたいですよ。

開館時間の問題だって、結論について、私が望んでいるものではなかったけれども、なぜそういう結論にいたったかはわかりますよというふうに「納得」できれば、人は怒ったりもしないし、恨んだりもしないと思うんです。そこが下手だと、運営者が一生懸命やっているのに全然利用者がそれにこたえてくれず、恨みばかり持ってしまうということになってしまう。

市民とともに何か企画を一緒にやったらどうかと、さきほど運営者の方がおっしゃっていました。私もよく実行委員会などで市民と一緒に企画をつくりますが、必ずその結論について、なぜそうなったかの説明を、例えばボランティアさんに対してかなりしつこく、詳しく、やっぱり返すんですよ、ちゃんと。特に結論が違っていた場合は丁寧に。そうすると、今度その人がなぜそうなったかというのを納得してくれていれば、その人は今度別の市民に対して、こちら側の視点でちゃんと話をしてくれるように、もうなっているはずなんですよ。それは、あなたの気持ちもわかるけれども、実はこういうこともあるんだよと、そういうふうに言ってくれる市民を運営者がふやしていけばいいと思います。それが信頼だと思うんですよ。

だから、使いやすさという言葉は、皆さんから見ると使われるということになるのかなど思ったりして、微妙な言葉だなと思っていたりしていました。自分たちの施設や自分たちを好きになってくれる、ファンになってくれる人をどうやってふやしていくかだと思うんです。つまり、信頼してくれるということなんですよ。自分の言ったことは一応ちゃんと受けとめてくれるということであって、それは、自分の思うとおりになるということではないんです。

ね。

例えば指定管理者制度に出しますよと言われたときに、それはこの施設が好き、それは困ると言ってくれる人がどのくらいいるかというのが、その施設の価値だと言ってもいいぐらいですよ。例えば指定管理者が決まったとして、その指定管理者が変わるといときに、ちょっと待ってと言ってくれる第三者、あるいは市民がいるかないかというのはその施設の価値なんです、やっぱり。それをあらわしてくれるんですよ。だから、そのファンをどうやってふやしていくかということにお互い知恵を出し合っていく運営ができれば、市民に聞いてよかったなというふうになるんじゃないかというふうに思います。

**○関本** いろいろ大切な視点、それから論点というのが出てきたと思いますけれども、要するに共通ですので、ちょっと漏れがあるかもしれませんが、市民参加型の企画に関して、単にただ参加するというんじゃなくて、企画、構成、PR、ある意味では運営に協働参加するというような点。それから、正規職員の資質、要するに利用者とのコミュニケーションをきちんと図ることができるような、そのユーザーの声をきちんと反映できるようなそういう資質をいかに高めていくかということですね。それから、指定管理者制度に関して、ちょっと図書館というところはなじまないんじゃないかということの意見もありました。それから、市民センターの稼働率をどうやって高めていくか。そして、西川さんの話は、ある意味ではいかにそれぞれの施設が要するに説明責任を果たすかという、そういうところもかかわってくるのかなと、僕はこう思うけれども、あなたはそう思う、その思うことをきちんと受けとめることができるような能力、したがってコミュニケーションづくりの場というものをどう新たに構築していくかということが大切なのかなというふうに思います。

それから、先ほど質問がありました、いろいろ市民センター、図書館に関して、質と量についてのちょっと提案等がございました。何か非常にたくさん視点というのがありますので、答えるということは非常に難しいかもしれませんが、それぞれ適宜関係するような機関、それからきょう来ていらっしゃるフロアのいろいろな人たちからご意見、それからご回答等をいただければというふうに思います。

大体、3時半を予定しているんですが、3時40分ぐらいをめどに進めていきたいというふうに思います。

何か、ご意見等ございませんでしょうか。

西川さんがおっしゃったように、市民と市民がお互い対話するという、そここのところが大切なんだというふうにも発言がありました。それは、僕なんかも本当に全面的に同意するところなんですけれども、皆さんのある意味では底力が問われているような気がしますけれども、何かご意見、それこそせつかくですから手を挙げていただければと思います。もちろん、施設関係の方でも結構です。

**○フロア** すみません、仙台市文学館の方にちょっとお聞きしたいんですけれども、文学館の中で手の回らない企画や、そういう考えているイメージがあるようなんですけれども、それを市民の方に手伝ってもらったりする企画をすることは難しいですか、それともできそうですか。

**○フロア（仙台文学館）** できるんじゃないかなと思います。完璧にできるかどうかはわかりませんが、現実的に今、文学館でもボランティアの方が木の伐採、草刈りに入ってくださいたり、いろいろな活動、友の会の方がいらっしゃったりしていますので、大量に募集して何か大きな組織をつくってとかではなく、本当に声をかけてくださる方と一緒にやっていくのは可能じゃないかなと思っています。

**○フロア** ありがとうございます。

**○関本** 次にないですか。例えば、具体的にこういう企画だったらこんなふうにはやれますかねというのを、今、もし思いついたら結構ですが。

**○フロア（仙台文学館）** 今も申しましたように、例えば先ほどの関本先生との話題の中で、森林公園からの道の話が出ていましたよね、あれに絡んで、まず木に名前をつけるという話なんかありましたけれども、そんなのもちょっとお声がけして、相談に乗ったりする場なんかはつくってきています。ただ、なかなかいざやり始めると、非常にその中でも正確さにこだわる方もいらっしゃる、そうじゃなくて親しみのほうがいいんじゃないかという方がいた

りとか、でもそんなのを練りながら進めていけると思っているんですね。その思っているんだという、ところが先生にはちょっとご不満かとは思いますが、とにかくいろいろな今お話くださった方のお声がけがあり、そこに私がお話を聞いて、何かご関心をお持ちで、何かして下さることがあるのかな、して下さりたいことがあるのかなと思ったら、それを伺う。また、例えば今、きのうまで電力ホールでやっていた拓本展なんかがあるんですけども、それをよかったらうちでという話が、何気ない会話の中であって、それが市民の企画として、多分数週間か数カ月後には文学館で行われるでしょうというふうなこともございますので、非常に私もうまく言えないんですけども、立ち話1つの中から、あるいはスタッフとお客様との会話の中から何か1歩進んで表示ができたり、進んでいくというのが今少しずつでもできていると思っています。

○関本 ありがとうございます。

○フロア 私は、利用するのはほとんどメディアテークの市民図書館に来ているのが多いんですよ。今、クラシック音楽の図書とか、あと文学のとかほとんど借りているのが多いんですよ。それで、若林図書館もいいんですけども、若林図書館より市民図書館のほうが自転車で来るのがちょっと便利いいんですよ。駐車場、自転車置き場も結構広いもので、それで利用しているのが多いんです。

○関本 今の発言に関連して、何かご意見等を。何か、全体に関して。

○フロア（社会教育委員） 社会教育委員をしております紅邑と申します。

きょうは、いろいろ皆さんのそれぞれの現場を使っただの感想だとか、それから施設の担当の方からのお話があったりということで、私もちょっと西川さんと同じように、何か政府答弁というか、そういうふうに言われて返すというのは、管理する側と利用する側というふうな感じに、どうしてもこういった場というのはなってしまうがちな中で、いろいろ意見が出てきたのは割とよかったなと思って、何かちょっとえらそうな言い方ですけども。

せんだい・みやぎNPOセンターというところは、仙台市の市民活動サポートセンターという広瀬通りにある施設の指定管理者ということで、今から10年前にそういった形で、その当時は委託管理でした。そこで、私たち民間で市民活動支援している側が市民活動団体の方たちの活動拠点として仙台市が設置した施設の管理に当たりましたが、もう一つは市民活動というものにより多くの方々が関心を持っていただいて、そこに足を運んでみずからそういった活動にかかわっていただくか、それからそういった市民活動団体が提供している情報だとか、サービスとかあるわけですけども、そういったことをある意味身近に感じていただける場所ということで仙台市が設置したんですけども、私たちの団体も実はそういったことを目的として設立した団体でしたので、目的が一致したということでその施設の管理に当たりたいということで、コンペの結果選ばれたんです。そんな中でいろいろ施設の管理ということは初めての体験でしたので、ほかの既にできている施設にスタッフが行って研修をさせていただいたり、それから自分たちが今まで使う側でしたので、使う側がその施設の人たちからいろいろ言われて理不尽だなと思うこととか、いろいろ体験したことをクリアにしていきたいという思いがあって、いろいろサービスのほうも考えてきました。実際、今度自分がその管理する側になってみると、今度利用者はいかにわがままかということをもた感じることがあって、そのちょうど両方がわかるという中から、いろいろな工夫をしてきました。

その中で、1つだけちょっと皆さんに事例としてお話ししたいのが、よく利用者の方がはさみを貸してくれだとか鉛筆を貸してくれとか、そういったことで事務局に訪れることが多いんですね。これは、1人2人ならいいんですけども、しょっちゅう借りに来られると大変仕事の上でも支障を来すので、いろいろみんなで考えた結果、要らない、そんなに新しくない、古い、でももう自分の家では使わないというようなものを持ち寄ろうということで、みんなの文具というコーナーをつくりました。そこにはホッチキスがいたり、ホッチキスの針がいたり、定規あったりセロテープがあったりというのがあります。それで、自分でそれを、そこに文具がありますということでお使いになった後、前使ったので、たくさん使ったから今度自分で補充を持ってきてくださったりとか、あとあそこに要らない

のがあるから、じゃ置いておくわという形でお持ちになったりということで、結果的に施設を私たちの団体が管理するだけでにとどまらず、利用している方たちと一緒にその施設を使っていく、もしくは運営していくというふうなことがいつの間にかできるようになってきました。

それで、最初懇談会もしておりましたが、懇談会をするというふうなことだと、やはり聞く側に言う側になってしまうんですけども、それを日常でしょっちゅう聞いていればいいんじゃないかということを経験的にしていたところ、何度目かの懇談会では、もう褒められることばかり言われるんですね、みんなによくしていただいたとか。なので、だったらこんな懇談会は要らないんじゃないかということでもなくしてしまっただんですが、今度はそういったことで、今度皆さんの声が聞き取りにくくなってしまいうということも、一方で今出てきているように思っているの、やっぱり適度な利用している方々同士、それから管理している側同士の話をする場というのが必要じゃないかというのが、今私が施設管理に当たっている側で感じていることです。

最後に1つだけ、いろいろな施設が仙台は本当にあるわけですね。私、こんなことを言っているながら文学館は行ったことがないわけですよ。それで、先日高知で文学館へ行ってきました。立派だなと思って帰ってきたんですけども、仙台はどうなんだろうと思いました。

施設巡りツアーみたいなものをテーマ別に例えばやってみるというのは、仙台は転勤の方も多いので、そんなことを横断的にやっていくことによって、この仙台のまちの魅力みたいなものをつくっていくみたいなことを考えることがあってもいいんじゃないかというふうにちょっと思いました。私のところの施設、初かどうかわかりませんが、ちょっとそんなことを検討していくのもいいかなというふうにちょっと思いました。

○関本 ありがとうございます。

いろいろな意見が出てきますけれども、全体にかかわるテーマ等でどうしてもこのところを発言しておきたいという方、ございませんでしょうか。

○星山 すみません、簡潔にとわれてしまったので。

今、ずっと全体を聞いていてすごく感じたんですが、や

っぱり言うてはいけないことが3つあるんだろうと思います。市民が利用しやすい施設をつくっていくプロセスの中で。

1つは施設が狭いということ、2つ目が予算がないということ、3つ目が職員が手いっぱいだと。これを言うというのは、別に施設の職員に僕は言っているんじゃないんです。そうじゃなくて、そのことを職員と市民がまず共有していく、その情報を。そのことが大事だということ、先ほど西川さんがおっしゃっていたかと、要するにおしゃべりできる空間の中でそういう認識を共通に持っていく、そうすれば、じゃどうしたらいいかということが、その次に出てくるんだろうと思います。

先ほど、松尾さんが図書館というのは近いほうがいいんだという、それから子どもたちが利用できるカウンターが必要だと言ったときに、どうしても出てくるのは、いや仙台市には泉区に新しく子供図書館できたよという話、でもそうすると若林区の人たちは、子どもたちがどうやって泉区に行くんだという話になってくると、何か対立的になってくるんですね。あるいは、その場所にもうカウンターは入れないよというふうになると、これ、じゃどういうイメージでカウンターというものを考えているのかということをもっと踏み込んでいったらいいんだろうし、それから例えば読み聞かせの問題なんかでも、これは図書館だけの問題じゃなくて、例えば市民センターが読み聞かせボランティアの養成をやっているけれども、その活動と各図書館がうまく今連携しているんだろうかという問題も出てくるんだろうと思います。そういう各施設間の連携ももっととっていけば、市民ともっと職員と一緒にやれる部分が出てくるのではないかと。施設同士の連携、市民と施設の連携というのを、そういう意味でお互いに意見交換、きょうもたくさん出ていたと思うんですが、それがもっとできるような場をつくっていくという意味で、さっきの3つをお互いに言わないように、そういう関係をつくっていくしかないのかなということ、全体を通して感じました。

すみません、時間とってしまつて。

○関本 ありがとうございます。

言いわけにしないということですよ。

それじゃ、時間が来ましたので、最後にきょうのパネリストの方々に一言ずつ何か。将来のためにでも、きょうの

感想でもいいですから、ちょっと一言ずつお願いします。

○川邊 私は、今お話ありましたけれども、利用率が98%超えて、抽せんに外れる確率が非常に高い場所を利用しているということで、できれば広いところを利用したいなと思っていますんですが、将来、あと20年ぐらいたてば建てかえがあるんでしょうか、そのときにでも間に合えばと思います。期待をいたしております。

○松尾 仙台には図書館が7館ありますけれども、90年代からとてもふえたわけですよ。でも、7館目は1999年だったと思うんです。ですから、この10年は新しい館がふえていない。私にとっては10分のところに若林図書館ができたので、とても図書館というのはありがたい、生活の一部に利用していますけれども、まだまだすべての市民がそうはなっていないというあたりで、図書館がもっと増えてほしいと思っています。

○佐々木 仙台文学館に今、井上ひさしさんの戯曲の資料が、これからも含めて全部資料は仙台文学館に寄贈しますというふうに井上ひさしさんが言いました。この間、評判になった「ムサシ」の関係資料も全部、仙台文学館にあります。つまり、これあと10年、20年したら仙台文学館は少なくとも戯曲の資料ではトップレベルの位置にあるというふうになるんじゃないかなと、そういう意味でも私は楽しみにしています。

○西川 私たちのNPOでは、何か事業をするときにいつも大事にしている言葉が1つあって、それは「助けて」というコミュニケーションをちゃんとしていこうねということです。さっき、紅邑さんが言ってくださった文房具にしても、やっぱり市民に呼びかけるということで何かが、呼びかけた結果としてみんなが持ち寄ることでその場がよくなっていくという、そういうコミュニケーション。

社会教育施設の価値は、行っている人にはわかるんですけども、行っていない人には全くわからない。文学館に行ったことない人には全然わからない。では、わからない人にわかるようにしてもらうにはどうしたらいいかというのは、運営者が、今知らない人にわかる言葉を教えてと行って、探しに行って、助けてと言っていくということな

んだと思います。助けてと言ってもらくと、人は手を出さざるを得なかったりします。つまり、助けてと言われたほうは実は当事者になっていくということなんですね。

で、助けてというふうに言っていくためには、こういう館にしたいんだという職員さんの気持ちがなければ、呼びかけることはやっぱりできないんですね。仕事だからというふうになっていると、絶対人には呼びかけないんですよ。この館をこんなふうな場所にしたいんだけど、私たちだけの力ではできないんだよ。じゃ、どうしたらいいか教えてとか、こんなことがあればいいんだけど、ちょっとくれない？とか。

職員さんたち自身が本当にその自分たちの館に、どうせ私が言ってもというふうに思う職場なのかどうかということがやっぱり問題になってきて、職場の中でこんな文学館だったらいいね、こんな図書館だったらいいねという話がいっぱいできていけば、そのためにどうしたらいいだろうかといったときに、市民に助けてと言えるようになっていくんだと思うんです。

だから、まず本当は内部の中で、私がどうしたいのかということ職員さんたち一人一人が語れるようになると、お互いに語られるようになるとすごくよくなるんじゃないかなと、助けてと言えるように多分なるんじゃないかなというふうに思います。そして、ありがとうと言ってあげたら、市民にとってはそれでも「この館は私が支えているのよ」という顔に必ずなりますから、そういうところを上手になっていただけるといいかな、と思います。私はどうしたいかということから話ができるといいですね。

ありがとうございました。

○関本 きょうは、4人の方をお招きしてパネルディスカッションを開かせていただきました。

佐々木さんが戯曲第一の施設として、文学館がなるんじゃないかという話がありましたけれども、あるだけじゃだめなので、それを生かさなければならぬので。つまり、委員長の発言を踏まえすと、情報を共有することができると、そういうような仕掛けをどうやってつくっていくか、そのためには職員の能力というものが問われる、職員の資質というものの向上というのが必要になるんですけども、その職員だけでやる必要はない、市民の人たちに助けを求める。その市民の人たちと一緒につながる。市

民の人たちのその運営能力を高めていく。そういった形で、人と人をつなぐ、そして人を生かす、そういう仕組みと  
いうものが恐らく公共施設にこれからもっと問われていくのではないかというのが、これが僕の最後の簡単なまとめでございます。

きょうは、司会の不手際で約15分も延びてしまいましたけれども、どうも皆さんご協力ありがとうございました。本日は、どうもありがとうございました。パネリストの人にどうぞ拍手をお願いいたします。

## 仙台市社会教育委員の会議セミナーアンケート集計結果

参加者数：80名

回答枚数：38枚

### 問1 市民センターについて

(人)

(1)利用頻度	よく利用する（月1回以上）	8
	時々利用する（2・3ヶ月に1回程度）	8
	あまり利用しない（年に1回程度）	8
	ほとんど利用しない	4
	利用したことはない	6
	不明	4

(2)施設を利用する時、不便だと感じること(複数回答)	すべての市民センターの休館日が同じ曜日（月曜日）	14
	利用できる時間が短い	1
	予約が取りづらい	6
	フリースペースが少ない	10
	ホームページの情報が不足	4
	参加したい講座・教室がない	7
	その他 ※別紙	6
	特になし	7
不明	6	

### 問2 図書館について

(1)利用頻度	よく利用する（月1回以上）	17
	時々利用する（2・3ヶ月に1回程度）	9
	あまり利用しない（年に1回程度）	7
	ほとんど利用しない	1
	利用したことはない	2
	不明	2

(2)施設を利用する時、不便だと感じること(複数回答)	すべての図書館の休館日が同じ曜日（月曜日）	15
	利用できる時間が短い	8
	フリースペースが少ない	4
	ホームページの情報が不足	2
	蔵書が少ない	5
	レファレンスなどの支援体制が不十分	3
	その他 ※別紙	2
	特になし	8
	不明	4

### 問3 博物館について

(1)利用頻度	よく利用する（月1回以上）	4
	時々利用する（2・3ヶ月に1回程度）	10
	あまり利用しない（年に1回程度）	17
	ほとんど利用しない	4
	利用したことはない	2
	不明	1

(2)施設を利用する時、不便だと感じること(複数回答)	すべての博物館系施設の休館日が同じ曜日(月曜日)	13
	利用できる時間が短い	7
	フリースペースが少ない	5
	ホームページの情報が不足	3
	関心の持てる企画が少ない	3
	調べ物をするときの支援体制が不十分	2
	その他 ※別紙	9
	特になし	5
	不明	7

#### 問4 セミナーについて

(1)時間	ちょうどよい	22
	長すぎた	9
	短すぎた	1
	不明	6

※上記の理由は別紙

(2)内容	たいへん参考になった	15
	参考になった部分もあった	17
	参考にならなかった	1
	不明	5

#### (3)セミナーについての感想 ※別紙

#### 問5 性別と年齢

(1)性別	男性	15
	女性	22
	不明	1

(2)年齢	20歳未満	0
	20代	7
	30代	2
	40代	9
	50代	9
	60代	6
	70歳以上	4
	不明	1

#### 問6 本日のテーマに関連して、使いやすい施設への意見

※別紙

## 仙台市社会教育委員の会議セミナーアンケート集計結果（別紙）

### 問1(2)

- ・ 備品(プロジェクター等)があまり新しくない
- ・ 参加したい講座があっても時間がとれない
- ・ 交通の便が悪い。(講座に参加することが) 学生なので時間帯的にも難しかったりします。
- ・ 自転車置き場に困る。行ける時が休館日と重なって行けないことがある。
- ・ 腰痛のため、座れることが苦痛なので、テーブルと椅子の利用をできるようにしてほしいと思っています。(片平市民センターの利用者より)
- ・ 必要な時に利用できない。利用料金が低い(企業に対しては低い)
- ・ 講座・教室の開催時間が都合に合わない。
- ・ 文学館の講座は利用していますが、近くの市民センターにも足を運びたいと思います。

### 問2(2)

- ・ 閲覧スペースが狭い(若林図書館)
- ・ 交通機関・駐車場が少ない

### 問3(2)

- ・ 魅力が耳に伝わって来ない。
- ・ 企画の時間帯の工夫を。勤めの関係で週1回×4回の連続講座の参加が大変
- ・ 交通の便。仙台駅からの便があっても、郊外から、自宅から仙台駅への便がそう多くない。交通費が高い。
- ・ 博物館は関心の持てる企画が少ない。文学館はすばらしい。
- ・ 料金の高さ
- ・ こういった施設に興味を持ってない。
- ・ 食事やくつろげる場所も欲しい。体験コーナー等も必要では？
- ・ 交通の便が悪い
- ・ 駐車場の駐車台数が少ない
- ・ 日曜日や祝日などに行くと混雑しているため、ゆっくり利用できない。
- ・ (利用できる時間が短い) 夜もやって下さらないと会社員はまず行けない。

### 問4(1)

- ・ (1について) パネリストの人数が4人というのは多すぎず、少なすぎず、といった感じだから。発表時間(一人一人の)が10分程度というのはよいため。

- ・（2について） セミナーの意義・目的がイベントの中で不明瞭であったため、時間が勿体無く感じたため。
- ・時間そのものではなく話しが長いのはいたしかたないのでせう。

#### 問4(3)

- ・タイムリーなテーマでしたが、コミュニケーションが全てなのでしょうか。西川さんがおっしゃった、人がどれだけ動くかが価値である。
- ・西川さんの言葉の中にヒントがたくさんあり、満足しました。  
パネリスト対観衆の位置だとなかなか意見を気軽に話せる雰囲気にするのは難しいなと思いました。  
佐々木さんの話を聞いて文学館に行ってみようと思いました。写真も素敵でした。
- ・もう少しユーザー(市民)を巻き込む仕掛けが必要。
- ・利用者の代表のお話を伺い、その施設のファンをどうつくっていくかが課題と思う。そのファンの人達がさらに和(輪?)を繋げて個人的な興味をこえて、伝える役割を果たすボランティアの養成が必要なのかも。
- ・市民センターについての議論に期待していたので別の機会に是非！考えるヒントはいろいろいただきました。
- ・西川氏の発言が後半に置かれたのが残念。最も示唆に富むものだったので。議論の焦点をもっと絞りこむべきだったのでは。
- ・パネル(ディスカッション)ではなくワークショップにした方がいろいろな意見が出たのではないのでしょうか？
- ・話す内容がパネリストの方によってバラバラすぎて比較というか、同列に考えるのが難しく、何だか統一感のないパネルディスカッションだったように感じました。しかし、パネリストの方のお話それぞれは利用者の視点から語られる施設論という点で興味深かったです。特に西川さんのお話がすごく面白かったと思います。
- ・異なる視点から利用しやすい施設について考えられていて、市民と双方向的な場となっていて良かったと思う。意見を出しにくい、勇気が要る感じであったので会場作りを工夫していただきたく思った。
- ・司会が上から目線で上手でなかったですね。自分の思いを述べていて、ディスカッションをどう盛り上げるか余りお考えでなかった様ですね。もったいなく感じました。
- ・松尾さんが言ったこと、子どもがカウンターでおしゃべり(情報提供)できる空間、新しくできる空間づくり、これは大切。市民センターでも博物館でも同じ。職員に要求されるものだと思う。社会教育施設は「人」だと思う。
- ・今まで社会教育主事の方々のお話を聞いたことがありましたが、実際に利用している方々の声が聞けるということが魅力的で私たち市民の普段言いたいけど言えないことを、今回、このセミナーを通して伝えていただいたと思います。
- ・あまり施設を利用したことがなかったのですが、各施設の取り組みや、今後の課題や利用者がより、利用してもらうためにどうすればいいか等の話が聞けて、とても勉強になりました。本日はありがとうございました。司会者の方、時間を気にしすぎだと思いま

した。また、意見を言ってくれた人に対して、そっけない返答の仕方が聞いてて気になりました。

- ・パネリストの方、最後まで要求でしたね。ちょっと残念です。まず「使いやすい」からスタートしたのが不思議。ただフラッと立ち寄ることはダメなのでしょうか・・・
- ・公共の施設(文化教育)に対する考えが変わりました。
- ・行ってみたいくなる場所としての成功例を一つ紹介してもらえると良かった。
- ・パネリスト松尾福子さんの話、何も出来ない私。立派な仕事をしていると女性として見習いたい。人の為に生きていて感心しました。かんばって下さいませ。
- ・西川さんの意見・お考えをもう少しお聞かせいただきたかったです。
- ・他の人が施設をどのような目的で、どんな風に使っているか等、解って、又自分の利用の時に参考になりました。
- ・テーマが広すぎるのでしぼりきれない。
- ・成功・自慢話・関係者の話(内輪のはなし)が中心であったように思う。失敗話など、ネガティブな報告話も聞きたかった(文学館・佐々木氏は別)

## 問6

- ・市民と市民が対話する機会がいかにかできるかを模索したい。
- ・自分も関わっていいんだ、関わりたいと思える施設
- ・市民と市民が交流できる機能は必須。交流同士がネットワーク化できると良い。
- ・仕事だから、しかし仕事。市民と職員のコミュニケーション、対話が大切だ。しかし心。
- ・博物館・科学館・文学館は仙台市内に点在しており、交通の便利なところにまとまってあれば・・・と思います。1日に1ヶ所だけではなくて、2ヶ所の関連施設を見て歩ければと思います。交通網も繋がっておらず、施設と施設を結ぶ点と点を繋いだ空間をつくりにくい。1日ゆったりとした時間を興味を広げたり、自分にとってゆとりの場を提供して欲しい。市民の一人一人のお気に入りの場所が公共施設に求められていると思う。離れている施設が多いので各施設のネットワーク作りも必要と思う。
- ・異種の施設間の連携・企画協力がまだまだ不足。司書や学芸員のセンスアップ、モチベーションアップを望みます。施設の立派さや利用時間の長短などよりも、市民(利用者)と本気で付き合う気のあるスタッフがいるかどうかは私にとっては最重要ポイントです。
- ・西川さんの話のように市民同士(行政も含め)が必要
- ・市民の立場で作られている、又はそういう姿勢になったビジョンを持っている施設。
- ・施設利用が無料であるから、駐車場等も無料であると良い。職員の利用者に対する“かんじ”が良くなければならない。今利用していない人は何に興味を持ち、どう考えているのかを知って、企画を作ればよいと思う。
- ・必要な部分は市民負担もわからなくはないが、市民活動の為に税金を取って作っている施設なのに設定料金が高いように思われる。また、企業等に対してはもっと高いハードル(料金設定)を付けてもよいと思う。食事や飲み物などが提供されるところがほしい(ビール位は置いてもいいのかも知れない)。もっとコミュニケーションを取れるスペースに

するべきではないか。市民センターなど料金収入で館を評価するのではなく、活用(動)状況で評価されるようなものにしてほしい。

- ・交通の便がよいことは魅力的に感じますが、それでも足を運ぼうとする人、しない人はいます。人によって行ってみたい、使いやすいと感じることは異なりますし、反対に一人一人のニーズに応えることは大変なことだと思います。私が行ってみたいくなる場所は①市民と職員のネットワークが成り立っている。②ゆっくり食べながら話せるスペースがある。③市民の意見が反映されることの3つです。定期的に市民と職員が意見を交わし合う時間、その意見をそれぞれがどう受け止めて活かしていくのか問われることだと思います。
- ・特定の人達だけではなく、他の人達、今まで利用したことのない人達が気軽に来られるようにすること。・もっと施設を身近にすること。・若い人向けの企画を何か提案。・生涯学習の充実を目指す。・これからもっと人と人とのつながりを重視していけるような環境づくり。・地域住民と連携し、行きたくなる、使いやすい、何が必要かの施設を考えていく。
- ・「市民が使いやすい施設」←最初の想定がここにあるのが不思議です。使う側と使ってもらおう側？
- ・交通の利便性、施設環境(学びの空間)がある。職員の接客対応(人のつながりのある)
- ・学習する場として、資格を取得できる勉強講座を開いたり、子育ての悩みや介護の大変さを解決できるような、生活に役立つ情報を提供してもらいたいし、その事によって、市民が集まり、情報交換できる楽しい場所にしてもらいたい。西川氏がおっしゃっていたように、参加しやすく、参加したいと思う人が増えるにはどうしたらいいのか一緒に考えていきたい。
- ・どこもそれなりに頑張っているようなので、その頑張りが市民に伝わる仕組みを見直しする必要がありそう。
- ・メディアテークにはお世話になっています。私の行ってみなくなる場所何かなあと聞いて聞き、大変いろんな事を知りました。私もちょうど70歳。元気でと文学館は月一度位。元気で長生きしたいと、市のバス券を頂き、人間の心の美しさ、人と人の会話、勉強になりました。ありがとうございました。
- ・施設で行われていること(利用した方の声も)をもっとたくさんアピールする。最後にお話されていた方、「言うてはならないマナーをお互いがもつ」これは、我々が生きていくうえでも大切だと思いました。ありがとうございました。
- ・高齢化が進み、死ぬまで元気でという、まず第一に毎日の食事が考えられます。健康で暮らす、注意しなければならない事等、年代別に分けて話を聞いたり、日々の食事の取り方等話を聞けるチャンスのある施設があったら良いと思います。
- ・もっと行事等のPRを。
- ・関心・興味を持つ参加者を相手にしているので、既存の事項にあまり必要性ないと感じました。この場に出てみたい人々をどうしたら参画させたらいいかを要求されているのでは？と思います。